

巻頭言

理療教育の新たな飛躍に向けて

筑波大学理療科教員養成施設長
緒方 昭広

昨年（2018年4月）本施設に着任し早1年が過ぎました。昨年度は、慣れないことも筑波大学内の施設や構造、大学内ならびに本施設のシステム、手続き手順、本学および施設学生の授業などなど慣れないことばかりでアツというまにすぎってしまったように今は感じれている状況です。この1年を振り返り大過なく業務などを遂行できたのも施設の教職員の皆様を始め、大学の教職員の方々のご指導、ご教示のお陰と深く感謝申し上げる次第です。

本施設は明治39年に創立し115年以上の歳月の歴史の中で、文部行政ならびに視覚障害教育ならびに職業教育、鍼灸手技療法の科学化（エビデンス構築）も果たしてきた役割と実績は言葉では言い尽くせぬほどの重みがあると思っております。長い歴史と今日までその役割と多大なる貢献を尽くし、膨大な実績を残してくださった歴代の施設長並びに教職員の皆様に敬服の念と感謝を抱かずにはおられません。

さて時代の変遷で、本施設の入学生は本来盲学校（特別支援学校）からの入学者がほとんどでした。しかしその入学者を送りだしてきた盲学校（特別支援学校）の生徒数が激減し、その余波は本施設に及んでおります。一般の18才人口も減り始めており、その原因を解決することはたやすいことではありません。

また来年2020はオリンピック・パラリンピックイヤーです。筑波大学としてもその成功に向けて多くの取り組みをしております。本施設も独自に前施設長宮本先生が道を開いてくださった「視覚障害者がボランティアに参画する」事を掲げ、さらなる邁進を続け本施設をアピールしていきたいと思っております。

本施設の歴史的重みと役割の重責、先輩諸氏に恥ずかしくないよう本施設の将来を現在の教職員並びに関係諸氏と相談しながら少しでも明るく一層充実した構想を打ち出していきたいと思っております。みんながきらめく施設にしていきたいと思っております。本紀要をご欄になられた方々より忌憚ないご教示を賜れば望外の幸せに存じます。

平成31年3月吉日